

# 特 殊 学 級 の 教 育

——「かん默で不動」のK君の事例をとおして ——

足利市立西中学校

小 沢 隆

## 1 は じ め に

昭和52年10月のことでした。足利市立西中学校長増田英一先生（故人）から、まったくの突然に、「来年度、本校に特殊学級を設置したいが担任候補として君に準備をすすめてもらいたい。」と話されました。

当時の私は、小学校を13年経験させていただき、西中学校に転任して5年目でした。

中学校教師になって、最も心を痛めていたことは、多くの場合、偏差値によって進路が決定されてしまうということでした。極端に言えば、多くの生徒が、君の偏差値はこれくらいだからこの高校にと、あり分けられておりました。

その頃、私は、時により、人間としての『その人なりのよさ』たとえば、親切だとか、やさしいとか、正直だとか、明るいとか、責任感があるといったよさを認め合い、伸ばしていくという本来の教育をおろそかにしてはいないだろうかと自問自答をくり返していました。偏差値に負けてしまった子どもたちへの教育の配慮もしなければ………と悩み考えていた矢先でしたので、校長先生から、このお話をうかがったときには、特殊教育のなんたるかも知らない自分を顧みもせずに、この大任をお引き受けしようかと考えてしまったのです。

数か月の準備期間も、あっという間に過ぎ、入学式では、五人の新入生を迎えるました。このときほど、かつて経験したことのないほど、厳肅な気持ちになり、責任の重さを痛切に感じたことはありませんでした。

机上では、いろいろとプランを練っていましたが、子どもたちの実態は、直接ふれ合ってみなければわかりません。その人となりとか人柄は、いっしょに仕事をすることによってわかるという私なりの信念もありましたので、先ず手始めに、草花栽培ができる場所づくり——そうです——開墾から始めました。校地の北側のブロック塀ぞいの空地を借り、つるはし、とうぐわ、スコップを使って、花壇づくりの開墾を始めたのです。焼却炉が近いということもあって、ガラスの破片や鉄くず類、ビニール類などを堀り出すなど、入学したばかりの子どもにはかわいそうなほどでしたが、それでもようやく80m程の花壇が完成しました。

『本気に、元気に、根気強く、そして、のん気に』をモットーにしながら、こうして私たちの学級はスタートしたのでした。早いもので、今年で9年めを迎えています。お陰様で、これまでに、35人の卒業生を送り出すことができました。今年は、11人の子どもたちと、共に励まし合い、共に学び、共に育つことを信条にして頑張っています。

## 2 K君の事例

### (1) かなしばりのK君

さて、前置きはこれぐらいにして、きょうは、私が体験いたしました数多くの事例の中の一つをお聞き頂き、特殊学級とはどんな教育をする学級なのかということを改めてお考えいただければ幸いに存じます。

その事例は、2年生のK君であります。K君は、小学校の6か年間は通常の学級で学習しておりましたが、西中学校への入学と同時に、私の学級でおあずかりしたお子さんです。

K君は、『かん黙のうえ不動』という心因性の行動異常のお子さんでした。

K君は、幼稚園のとき、歌を歌って笑われるということがたびたびあったそうです。そのために、しゃべらないお子さんになってしまったということです。家族やごく親しい人の間ではおしゃべりをしますが、一歩家の外に出ると黙りこくってしまう——場面かん默になってしまったのです。そのうえ、立ったら立ったままの姿勢で何時間でも動かさずにいるという不動様の状態になり、小学校時代を過ごしたそうです。小学校の先生方は、専門の教育相談を受けてほしいことや特殊学級への入級を勧めたそうですが、両親は、『うちの子は普通なんだから』と言い張り、がんとして受け入れなかったそうです。

小学校側からの依頼もあって、K君宅へ最初に家庭訪問したのは、彼が6年生の12月の末でした。そのとき、私は、『中学校は教科制なので教室移動が頻繁にあり、先生もかわります。45人の編成でもあるので、いじめの問題が起こるかもしれません。通常の学級では何が起こるかわからないので責任がもてません』など、3か月余の歳月をかけて説得し、やっとの思いで入級の承諾を得ました。

新入生6人をベテランの女の先生にお願いし、これまたベテランの男の先生を副担任にして、1年生だけのクラスをつくりました。

K君についての指導方針として、学校生活で起こる必要な援助は、仲間や私たち担任が分担する。そして、K君の心の中に、自分からやらなくちゃ悪いなという気持ちが生まれてくるまで、やさしく根気強く続けることなどを確かめ合いました。

聞くと見るとおおちがいで、K君の状態がこれほどひどいとは思ってもいませんでした。かん黙という状態よりも、自分の意志では動かず歩かずといった不動の方が大変でした。ですから、昇降口に立ったときから、私たちの援助が必要なのです。先ず、上ばきを出してやります。足を持ちあげ、下ぐつを脱がせ、はきかえさせます。それから、手で引いたり、体の一部を押したりして教室に入れ、カバンをはずして机の横にかけてやります。椅子を引いて、肩を押して席に着かせます。学用品の出し入れをしたり、ズボンを脱がせて体育着に着せかえてやります。手を引いてランニング。腰を押してのふきそうじ。片手で口を開け、ちぎったパンを口の中に入れ、牛乳を流しこむといったやしない給食。万事こんな調子で、一日を無事に過ごさせて、昇降口まで送り、くつをはきかえさせて……この毎日のくり返し。

専門書には、『原因はよくわからない。同じような状態の子のいる治療施設に入れるとよ

い。しゃべらないということを誰れひとり知らない環境に移せばしゃべるようになるかも……』など、書いてありました。専門の先生にお尋ねしても納得のいくお話は聞けません。まったくの暗中摸索の指導がくり返されていきました。

家庭との、ある日の連絡日誌に、『犬を連れて散歩』と、たった1行書いてありましたので、放課後、その姿を確かめに出かけたり、近所の人にも聞いてみると、すべて普通の子でした。家庭訪問のおりに、『どうして学校では、しゃべらないのでしょうか。』と、話を向けてみると、父親も母親も、『あのとき、まわりで笑わなかったら、こんなにならなかった。先生が注意しなかったからこうなったんだ。』と、語気強く話されます。黙りこくり動かないのは、友だちのせいだ、先生のせいだと、本人の前でも平氣で話します。この親の学校不信、友人不信が、本人の心の中にも形成されたのかも知れません。もう、7年も……です。

## (2) 心を開くことを願って

毎日毎日、同じことを根気強くくり返すだけで、なんの変容もなく、ただ時間ばかりがいたずらに過ぎて行きました。5人の同級生と10人の先輩達は、K君の悪口ひとつ言わず、やさしく援助を続けてきました。この仲間の行為がK君に通じないはずはないと思いながら、とうとう1年が経ちました。昭和61年度は11人で1クラスです。K君を親身にもまさるほどにお世話を下さった担任、副担任の先生は去り、今年度の担任は私ひとりです。私は、この1年間をいろいろな面から振り返り、今後の指導上の留意として、次の3点をまとめました。

その1 K君は、歩くときも立っているときも、時々、首をあげたり横にふったりしています。これは、周囲の人の動きを極めてよく観察しているといえます。そこで、自分の行動をまわりの人がどの程度注目しているかという意識が敏感であることに留意して指導する。

その2 先生が計算をまちがえたとき、『あんなやさしい計算をまちがえた。こうやればいいのにね……。』と、母親に話したそうです。父親には、『みんな、ボール投げが下手だよ。』と話したそうです。連絡帳を出して、鉛筆を持たせてやっても、ひとことも書かないので学用品やその他の用意はできています。これらのことから、K君は、なかなかの勝気であり、かなりの判断力や記憶力があることに留意して指導する。

その3 K君の行動は、学校不信、友だち不信からきてはいまいかという考えに立って、不信を解消し、心の窓を開かせる手がかりをつかむように留意して指導する。

この1年、仲間たちはさりげなく彼の学校生活を援助してきました。お休みのときには、欠かさず出向いて、お見舞もしてきました。長期休業中の草花管理当番日には、外出しないのは承知していても、必ず迎えに行っていました。これらの活動を通じて、私たちは、『ただただ、心が開くことを願う家族的な雰囲気の中での、みんなのやさしい思いやりの心が伝わらなかつたはずはない。やるだけはやった。きっと伝わっているはずだ。』と、確信していま

した。

新学期でもあり、3つの留意点を生かし、まわりの人々への信頼感を育てるために、1年前の入学式の日から今日までの主な出来事をやさしく話し、訴えかけにはいられませんでした。そのお話を1例を申しますと、『K君よ、はじめてラケットを持ったときのことを覚えているかい。みんな、かわるがわる、"こうやって振るんだよ"といって腕を持って教えてくれたよね。君は、ハアハアしながら、顔をまっ赤にしていたね。今年も卓球大会があるよ。みんなと出ようよ………ね。』『K君は、ほとんど休まないって、みんな感心していたよ。ほんとだ。休みが少ないね。先生もえらいなあと思っているよ。学校に来るのはやる気があるしょうこだよ。今年も頑張ろうね………。』K君は、ただ一方的に聴くだけでした。

こんな調子で、毎日少しづつ語り続け、1年間の物語が終わるころになると、ようやく彼の表情がやわらかになり、目もとをしばたくようになってきました。私には、K君の心が感動で、ゆれ動いているのが手にとるようにわかりました。『しました。』と、思いました。そこで、私は、ひそかに考えていたことを実行するのは今だと思いました。

### (3) そのときがきた

4月16日水曜日の朝のことです。K君は、いつもの通り、首をあげたり横に振ったりして、一足が一步分の歩幅で、せっせ、せっせと教室の前を通りました。1時間目から家庭科の授業のため、仲間たちは調理室へ移動したあとでした。彼の登校を私ひとりで待っていました。私は、勝負の一瞬は、『昇降口で、下ばきを脱がせること』と、固く固く心に決めていました。立ち止まらせてはいけない。昇降口に着いたとき、立ち止まる前に連続動作で上げきにはきかえさせ、その勢いで教室に入れることだ。私は、先回りをして待っていました。

石段に足をかけ、首があがりました。彼の目には、私の顔が映ったにちがいありません。顔は赤みがさし、ひきつれています。彼はいつもの場所に立ち止まりました。『さあ、思いきって』ひとことかけました。私の声に、『びくっ』として、体を斜めにしながらしゃがみ始め、右手を右足にかけ始めました。ゆっくりゆっくりでしたが半分ほど脱ぎました。左足も半分脱ぎました。動きは、ゆっくりでしたが、確実に手が足が動いています。自分の意志で動こうとしている彼の姿をはじめて見ました。顔はひきつれ、手は震えています。心を開きかけています。『ほれ、がんばれ』『そう、もう少しだ』『手を持って』『できるできる』『さあ』『それ、その調子だ』彼の動きが止まりそうになると、口走りました。こうして、通学用の運動ぐつが脱げました。湯気のあがる額。ほほを伝わる汗。30分間の格闘でした。

『くつを持って』右手でつかみました。左手は、肩かけかばんをギュッと握っています。『立って』『それ、立って』『上ばきはどこかな』入口から2メートル程の所にげた箱があります。歩くか。動きません。『右足を出して』動きません。だめか。私は、しゃがんで、彼のひざを見ていました。ひざがあがってくるものとばかり思っていました。そうではなかったのです。彼は、足首を床にこすりつけて足の指を動かしていたのです。止まってはいません。しゃくとり虫の動きをしていたのです。右足を少ししゃくとり動きをすると、次は、左足

を………といった具合で………どうにか、やっとの思いで自分のげた箱につきました。

〈下ばきを脱ぎ——手に持ち——运び——上ばきと交換して——上ばきをはき——教室の方へ歩き出し——教室に入り——カバンをかけて——椅子を引き出し——すわり——椅子を引きよせ——姿勢をとる〉これは、昇降口から教室の座席に着くまでの動作です。3時間かかりました。彼のほほには涙が流れっていました。私はすごく嬉しく、何か一大事を成し遂げたときのような心情になっていました。7年間、かたくなに自分の殻にとじこもっていたその厚い厚い殻を、ついに打ち破ったのです。つらかったでしょう。ありがとうK君。よくやったね。私のほほからも熱いものが流れしていました。こうして彼は、私に心を開いてくれたのです。

過去7年間、学校では、何ひとつとして、自分の意志で行動していませんので、自信がないのか、見られているという意識が強いのか、できるようになった動作も途中で中断してしまいます。ですから、絶えず自信を与えることばをかけてやりました。みんなが見ても決してはずかしくない。やらないでいて、どれだけ得をしたのか。みんなは、君がやれるのを信じている。さあ………元気を出して………と、短いことばで呼びかけていたのです。また、新しい動きは、はじめから仲間の前でもできません。私と二人きりで習得した動作を、少しづつあせらずに、仲間の前で披露しながら自信をつけていきました。学用品の出し入れ、体育着の着脱、牛乳飲み、ランニングなど、徐々にではありますが、自力でできるようになっていきました。

そして、ついに、仲間の人たちにも心を開くときがきたのです。私たちの学級では、朝登校しますと、一人一係りの仕事をします。そして、仕事の終わった順に席に着いて、みんなが来るのを待つようにしています。5月13日、火曜日、今朝もK君の来るのを待っていました。早くも、5月ですので、なんとか仲間の人の呼びかけに応じさせようと、呼びかけ当番さんを決めて努力しているときでした。S君も、Y君も、T君も………Aさん、Hさんも………だめでした。とうとう最後の砦、M君が今朝の呼びかけ当番さんです。M君は、登下校いっしょの上級生ですので、K君との距離が最も近い人です。M君ならば………あるいは……みんなの熱い期待と不安が入り交りながら、ドアが開かれるのを待っていました。『カタン』ドアが開きました。みんなの顔が一齊にドアの方に………。なんと、そこにはK君が見えるではありませんか。K君が立っているではありませんか。『わあー』と、明るい歓声。K、K、KのK君コール。踊り出すI君。だき合うS君とH君。頑固者のK君もついにM君の軍門に下ったのです。たかが昇降口から教室までと、みなさんにはお思いになるでしょう。ですが、K君にとっては、この動作を突破することがすべてだったのです。完全にひとりでできるようになったのが6月18日だったことを考えても、彼にとっては、それは険しい岩壁だったと言えましょう。

仲間たちの1年余りの努力が報われ、今では、動作については、どうにか一人前になってきています。10月7日に実施された仲よし運動会での中学校対抗のソフトボール大会では、西中のエースとして二試合完投する大活躍をしました。校内の運動会では全校生徒父母の大

観衆の見守る中を個人走に出場、完走しております。

ところで、K君のもう一つの問題行動である「かん默」についてですが、9月10日になってはじめて、『ハイ』と、声を出して返事をしてくれました。今では、〈心に太陽をもて〉の詩を覚え、小声ですが、仲間の人たちの前でも言えるようになっていますが、ふだんの会話はまだまだ不十分ですので、これから課題として取り組んでいく所存です。

#### (4) K君の心に映った特殊学級

この1年半の彼の学習は、今後の彼を大きく飛躍させるものと信じます。彼のこのような成長を、みなさんはどういうふうにお聞きいただけたことでしょうか。

ご質問のとおり、答えは、特殊学級という環境から受けた、仲間たちの心のあたたかさ、やさしさが、彼の閉ざされていたかたい心を開かせたと言えましょう。それでは、彼の心には、私たちの学級はどのように映ったのでしょうか。彼は、きっと、こう言うでしょう。

- ・ ぼくの面子を傷つける敵はいなかった。かえって、ぼくを支持してくれる友だちばかりだった。先生もこわくない。先生は、ぼくのよき理解者だとわかったから、警戒もせず、安心して、自分をさらけ出すことができたのです。
- ・ 毎日毎日、最も密接にふれ合っている友だち同士が、お互に、べっ視し合うことなく、手をつないで生活している。だからいじけないですんだのです。
- ・ 力の優劣の差がほとんどない友だちと生活しているので、ぼく自身の中に自信がわき、ぼくにもやれるなと思うようになったのです。
- ・ 国語や算数などの教科の学習もしましたが、それだけでなく、衣服を着替えさせてくれたり、身のまわりの整理整頓をしてくれたりして、日常生活に欠かせない基本的な事柄をくり返しきり返し教えてくれました。友だちもやさしく、ていねいに教えてくれました。まだ、お礼も言いません。
- ・ 12月には、もちつき大会をしました。たかがもちつきと思っていましたが、招待状を書いたり、費用の計算をしたり、かまどを作ったり、うすを洗ったり、先生方や小学生を接待したり、いろいろと順序よく力を合わせてやっていくうちに、考えの間違いに気づきました。何から何まで、これから的生活に役立つことばかりでした。
- ・ 畑を耕したり、草むしりをしたりして、草花を育てる勉強もしました。友だちは、分担し合って手ぎわよく作業をすすめます。先生は、「どんな仕事でも、必ず自分にできる仕事があるよ。その仕事を真剣に観察して考えてみると、自分には何ができるのか、しぜんにわかってくるものだよ」と、くりかえし言います。石ひろいや草むしりや水くれは、ぼくにもできました。
- ・ 先生は、わかるまで教えてくれる。きょうだめならあしたまた教えてくれる。1対1でも教えてくれる。だから安心して勉強できます。

K君の心には、『お互いに助け合い力になり合える適切な友だちがいて、安心して学習で

きるカリキュラムが用意されている学級——これがぼくのいる特殊学級である』と映ったことでしょう。

### 3 おわりに

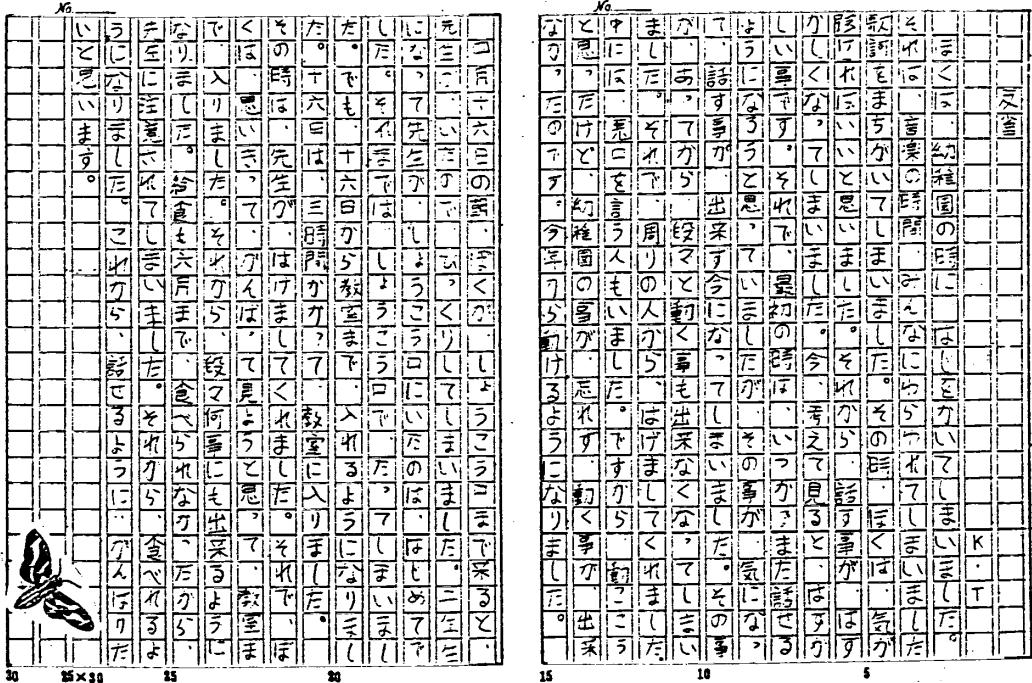
どのお子さんとも多様な問題をかかえての出会いでしたが、半年、1年と経つうちに、みちがえるように成長していきます。K君と同様、Mさんは、いじめがもとでクラスの底に沈み、2年間を登校拒否の状態が続きましたが、入級1年後の今日では、早朝の7時30分には登校して、正面玄関をはき清めるほど、しっかりとしたお子さんになってきています。Y君は、ささいなことでも感情的なり、奇声を発し、机をたたいてわめきちらしていましたが、入級半年後の頃から徐々に自己コントロールができるようになり、今では、笑顔で応答できるほどに成長してきています。

このように、お子さんが変容する要因はいろいろ考えられましょうが、絶えずお子さんと接しているのは、担任と友だちですので、担任を含めての学級の雰囲気(環境が)、お子さんにとってどうであったかを抜きにしては考えられないでしょう。

力不足の担任ではありますが、私は、子どもに話しかけるときには、その子の心にしこりを残さないようにと心がけています。例えば、動作がのろくて、うまくやれないお子さんに話しかけるとき、『○○君は、みんなより遅いけど一生懸命やろうとしているね。心をこめて打ちこんでいるよ』と、ほめて言います。また、自分勝手なふるまいをするお子さんには、『○○さんは、いろんなことに興味があるんだよね。いろいろやってみたいんだよ……。』と。『のろいね』と、言われれば不安になり、急ごうとするでしょう。『自分勝手ね』と、言われれば、イライラするでしょう。誰れもが快い気分で、のんびりとマイペースで生きていけるような配慮をすることによって、子どもの心の中には、安心して生活できるなという気持ちになるでしょう。誰れもが、自分の環境の中に安心感と存在感を欲しているのです。

私は、今後とも、ハンディキャップを負う子どもたちの能力や特質にふさわしい学習環境を用意し、そこで、友だちと仲よく学習し合いながら、情緒の安定性や自主性、積極的な行動意欲をもたせるような学級づくりに、ますます励んでいきたいと思っています。

(次ページに、K君の作文の一部を載せておきます。)



(第32回 栃木県特殊学級手をつなぐ親の会県大会並びに研修会の体験発表で  
使用した原稿です。昭和61年11月4日 足利市民会館大ホールにて)

### 評

障害はあっても、ひとりの人間としてしっかり見つめ、必ずや心を開いてくれるものとひたすら信じて取り組まれた担任の先生の深い人間愛に敬服します。

かん默は本人を取りまく人間関係の歪みの中で起る心の病であります。特に幼児期又は学童期における人間関係が大きく影響します。人間関係の中で起こるものであれば、これを改善することでしか、かん默児の重い心の扉を開くことはできません。そのためのかかわりは、本人に心を開くことを要求するものではなく、周囲人々が心を開くことであります。周囲の人々が心を開くとは、かん默児に対する見方を改めるということであります。先生や仲間の子供たちの思いを伝えることであります。

この事例は、一人の子をかけがえのない人間としてみたとき、単に「教育とは何か」を問うものではなく、「この子にとって教育とは……」を深く考えさせられるものであり、まさに教育の原点を見つめた取り組みであるといえます。

文面からK君の心の叫び声が、汗まみれになって取り組む担任の先生の苦悩と愛の声が、そして級友の歎声が聞こえてきます。